

『文部時報』一九五三年五月（文部省調査局編集／帝国地方行政学会）

勤労青少年の生活と教育

—実態調査に基く考察—

矢口 新

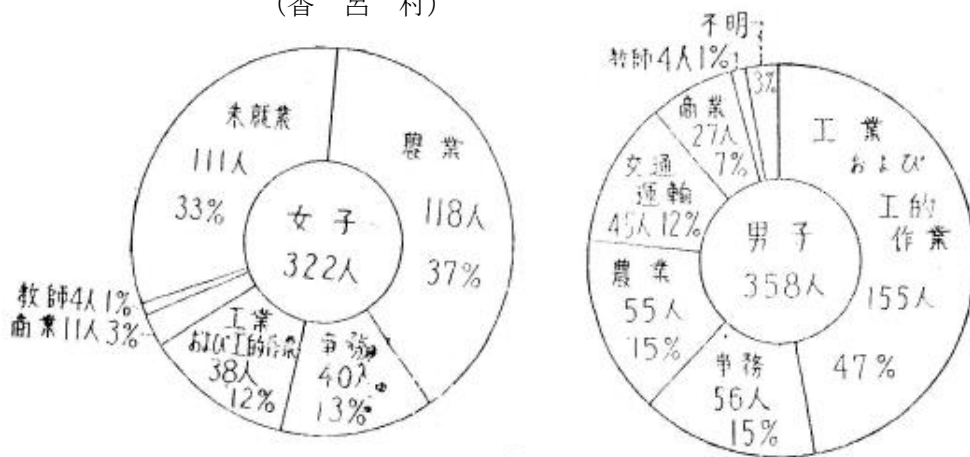
はしがき

国立教育研究所青少年教育部調査室では、昨年来、青少年教育調査を行ってきた。これはさまざまな類型の地域・職域をとって、そこにおける勤労青少年の悉皆調査を行い、生活や教育の事情について明らかにする一方、その地域・職域における勤労青少年に対する教育機関すなわち青年学級や職場の教育施設の活動状況をも把握して、この二つの面から勤労青少年の教育についての実態と問題点を明らかにしようとしたものである。その調査の計画の細かい点は後日に譲り、ここではその結果の一部を材料として、勤労青少年教育の実態と問題点を述べてみたい。

まず、農村の青少年から考えてゆくことに

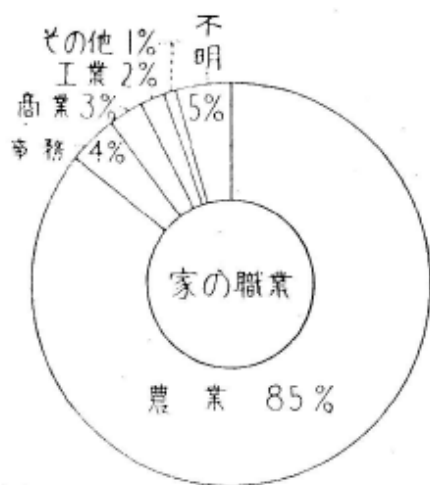
しよう。一口に農村に住む青少年といっても、実はさまざまなものがあるのである。その一例として今回調査した村の中で兵庫県神崎郡香呂村というのをとってみる。この村の青年の職業構成をとってみると、1図のようになる。これは満十六才から二十六才までの村に住む勤労青少年を全部とったものである。（もちろん学生はのぞいてある。）これをみると、男子三五八名のうち、農業を行っているものはわずか一五%であつて、他は工業・商業その他の職業についているのである。女子三二二名のうち農業三七%であつて、これは男子よりはるかに多い。しかし工業およびその他の職業についているものも三〇%に達している。また就業していないものが三三%いるが、これは嫁入準備期の女性とその他に家庭婦人を含んでいる。そして就業していないとはいふものの、おそらく忙しい時

1図 青少年の職業構成（16才～26才）
（香呂村）

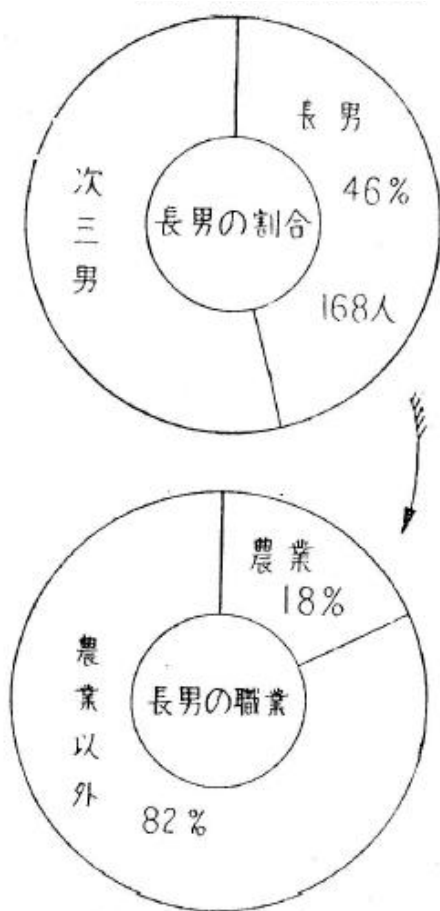


は農業労働にかり出される婦人とみてよいであろう。

2図 家の職業 (香呂村)



3図 家庭の地位と職業



ところでこの村は姫路から汽車で三十分ばかりの所にあり、播丹線に沿って交通はきわめて便利である。しかし、村は純農家が多いのであって青少年もその大部分は家が農家である青少年なのである。試みにそれをグラフにしてみる。次のグラフ(2図)は前にあげた青少年の家の職業は何であるかを表わしたものである。これによると八五%までが農業であつて、いわゆる農家の青少年であることがわかる。このように農家の青少年でありながら、現在決して農業を行っていないのである。これは教育上きわめて注目すべきことであつて、ただ、農村に住む青少年であるからというので従来の農村にあつたような伝統的な教育を行つていったのでは、これらの青少年のための教育とはならないであらうということを考えさせるものである。

ところでこれらの青少年は、いわゆる二男・三男であるかといふと、そうでもないのである。今職業についている男子青少年を、長男とそれ以外に分けてみると、長男は四六%である。その長男のうち農業についているものは一八%しかない。それを示したのが、二つの図表

(3図)である。上は長男の割合で、下は、その長男の職業である。すなわち長男の八〇%以上は農業以外の職業についているのである。こうしてみると、この村の農業は結局男子青少年をほとんど必要としていないということである。つまり、親と娘とによって農業は営まれ、男子青少年の大部分、女子の三分の一近くが、農業以外の職についているということである。これはこの村が非常に特殊であるからであるのかといふことと決してそうではない。実地調査の結果は普通の農村となんかかわりがなく、それが明らかになった。ただ姫路市という都市に近いことは特殊であるといえはいいえる。事実農業以外の職業についている青少年はほとんどすべてが姫路市へ出て働いているのである。

だから姫路の近郊にあるといふことが、こういう状態を生み出したものと一応考えることはできるのである。いわゆる近郊村の形態といふことができるであらう。

けれどもわれわれが考えなければならないことは、こういう現象の

底にあるものである。姫路近郊ということは、たまたま地理的位置がそうであったというにすぎないのであって、たいせつなことは農村の青少年が、農村で働かないで、それ以外に職場を求めているということである。いかに近郊にあると、農村に仕事があれば、外へは出ないはずである。普通の農村で、否、一般的な村と比較すればむしろ裕福なこの村なのであるが、そういう村が、青少年を外に出しているということなのである。もっといえば、村では青少年を働かせる職場がないということなのである。このことは教育問題にとつてもきわめて重要なことといわざるをえない。

おそらくこれらの青少年は、大部分はこのまま都会に出て長い間働くであろう。ただ、長男たるものは、親にかわって農業をする必要が起つたとき、農村の仕事場に帰ってくるであろうが、それはしかし、おそらく十年二十年の後でよいことなのである。農家の交替率は二十七〜八年といわれているから、かなり長い間外に出て働く期間があるのである。二、三男に至っては、現在は村に住んでいるけれども、やがて長男が嫁をもらい、あるいは本人が嫁をもらえば、どうしても外へ出なくてはならない。現在は、いわば村に下宿しているようなものである。このように考えると、この村の青少年の大部分が現在から将来にかけての生活からみて、この村とは必然的な結びつきをもっていないということになる。たまたま村に生れたということに過ぎないとさえいえよう。本来は都市の生活者なのである。

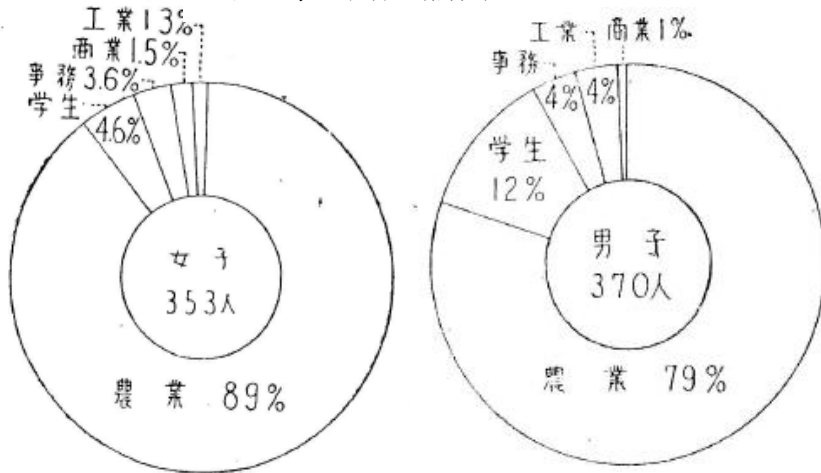
こういう青少年に対する教育をどうするか、また、現在なされている教育がいかなるものであるかということについて、われわれは根本的な考察をしなければならない。

ところでこの問題はひとり香呂村のような近郊村だけの問題ではないのである。多くの純農村といわれる村が潜在的にもっていること

なのである。次にそういう村の例について考えてみたいと思う。茨城県東茨城郡の橘村の例をとってみよう。

この村は、常盤線石岡駅からバスで一時間以上も東へは行った所であるが、交通の非常に不便な所であるこの村の、青少年の職業構成は

4図 家の職業 (橘村)

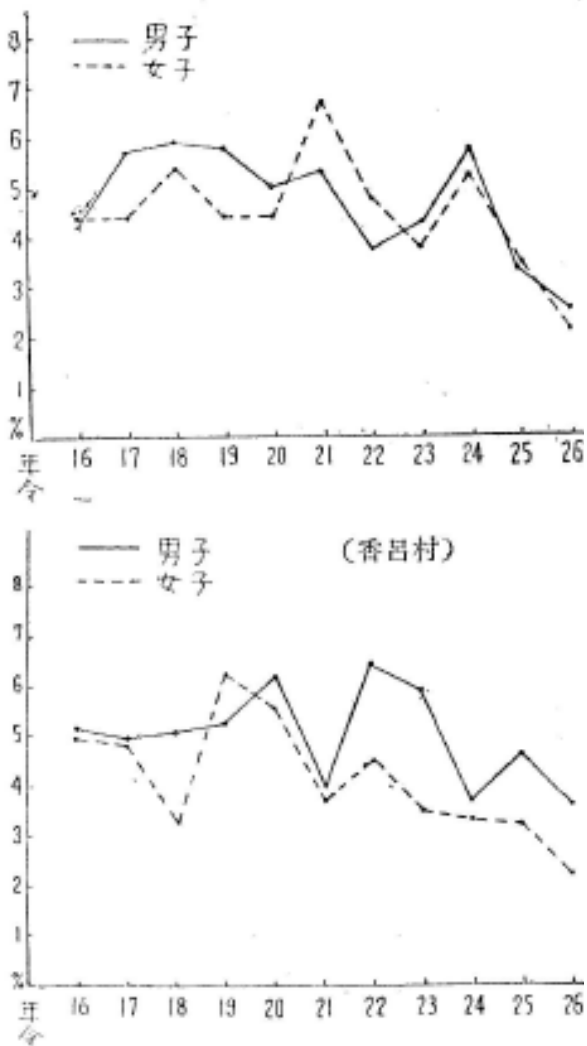


上の図表(4図)のごとくである。これによってみると、香呂村と著しく異なっていることがわかる。すなわち男子八〇%、女子九〇%が農業を現在やっているのである。純然たる農村青年であるということができる。

ところがこの村も実情をよく調査してみると、これらの青少年は、二十才を過ぎると、村を離れて都会へ出るのである。これは、近年引きつづいての習慣ともいべきものになっているのであって、いわばそういう形で村の過剰人口を処理している

のである。その傾向を示すものは、5図の年齢構成のグラフである。これを見ると、二十二才以後の青年の比率はどんどん減少して

5図 青少年の年齢構成 (橘村)



る。二十四才だけは男女ともに高いが、二十二、二十三、二十五、二十六とほとんど減少しているのである。これをさきの香呂村と比較してみると、香呂村も二十才をこえると減少の傾向にあるが、これは先に述べたような事情で当然であるが、橘村の方がいっそうはなはだし
いことが明らかである。

このことは橘村のように現在農村に在るのみでなく、実際農業をやっている青少年といえども、一人前になると、村をはなれなければならぬ運命にあるということである。橘村の青少年はそういう運命をもった青少年なのである。とすると結局これらの青少年が現在村にいて農業にたずさわっているということは、いったい何を意味することになるであろうか。それは年が長じて故郷を離れることができるまでの間を自分の生れた家にいるということである。しかし、その間かれらは農業をしかやっていないのであるから、都会へ出て働くための

準備はできないのである。農村はさしあたって食う米にこまるわけではないから、一人前になるまでは青年をうちに置いておくということであろう。それは習慣的なものであり、きわめてあたりまえのことである。しかし青少年にとっては、将来の生活を自覚した場合、それは決して望ましいことではない。ただ、自覚しないでするとそういう生活を営んでいるのである。

要するに橘村の青年は、一種の使役として農村に働いているのである。人々の話によると、都会へ出る青年は多く自由労働者のものが多いという。二十才を越えるまで農業をしかやっていないくて、教育をうけていない青年たちの行く道は、そうなるのが、あたりまえである。この村の青年団体活動や青年学級の微々としてふるわないのも、こういう青少年に対するはつきりした考え方をもっていないことにあるのではないかと思われるのである。ここでわれわれは香呂村の場合

よりも、もっと深刻な教育問題にぶつかると。香呂村の場合、むしろ近郊村という事情が、問題をあらわにしている。そして青少年も、最初から都会の生活に入って生活を通じて、将来の生活者たるべく形成されているのである。橘村の場合も、それがもし都会の近郊という事態に恵まれたなら青少年たちは香呂村と同様な道をたどるのであるまいか。そしてその方が幸福であろう。ところが橘村の青少年はそれを明確に自覚せず、しかもばくぜんと、将来自分村の生活の中に位置づかず、やがてはほうり出される運命にあることを本能的に感じている。といつてなんらなすことなく、その日その日を農業の使役として生活しているのである。これで青少年が自

立的に、はつらつと活動するようなことがあつたら不思議である。農村の青少年は生活に位置づかない青少年なのである。農村の潜在失業ということはよくいわれることであるが、このように深刻な教育上の問題をもっているのである。

二

以上二つの村を例にとつて、そこに住むいわゆる農村の青少年たちの生活を分析してみたのであるが、現在の農村はさまざまな形でこのような青少年教育の問題に当面しているのである。今回調査した中にもまだこの他に種々な類型の村や町がある。たとえば群馬県の鬼石町のごときは、その一つの典型であるが、これは青少年を離村させるという形でこの地域に位置づかない青少年を処理しているのである。この町の青少年の現住人口の総人口に対する比は一般の町村に比して約半分なのである。これは青少年が新制中学を卒業して一、二年のうちには半分以上出て行くことを示している。こういう形はまだしも青少年の将来の生活を考えれば幸福だといふことができよう。どうせ都会に出るならば早い方がよいということである。橘村のごとく、どっちつかずの数年をその日暮して過ごすより、どれほどか前途の見込みがあるともいえるのである。

あるいはまた季節出かせぎという形で、青少年を村に置いておくというのものもある。新潟・富山あたりには昔からこういう形が存在していたが、全国的に見て現在こういう形のものはかなり多いのである。また、漁村などには特にこういう形態のものが多いと思われる。今回の調査でもそういう漁村がいくつか見られる。そして今回の調査で、農村で、青少年を将来その地域の生活に位置づけて行くことができるであらうと思われる村はぜんぜん見当らなかつた。二、三の村や町で現

在比較的産業が活発なために、青少年が働く地位をえているという所は見られたが、それもこしばらくの間というものであつて、決して長い将来にわたつて、それが可能だということではない。

これらの事情をみると、現在の農村の潜在失業の問題は、青少年の教育問題の前提としてきわめて深刻な問題だといふことができるのである。農村の潜在失業の問題は農村の青少年の問題であり、それは教育を全面的に規定する根本問題だといつてよいと思われる。どこへ行くかわからない前途の暗い青少年にとつては教育の問題もたいせつだが、それ以前の問題があるということである。

ところで、一方都市の勤労青少年の生活はどうであるか。農村の青少年を吸収するのは都市であるが、都市はどのような形でこれを受け入れているかを、農村の以上のような問題を考慮に入れて考えてみよう。

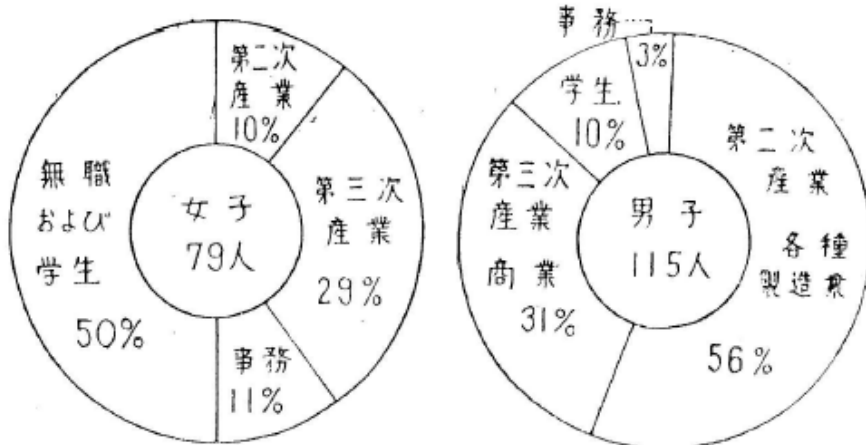
今回の調査では都市青少年の調査を主として東京で行つた。その形は地方の都市でも見られるような典型的なものを選んだのである。まず東京では五つの小地区を抽出したが、それは、台東区松葉町・墨田

世帯の職業構成

	松葉町		平井町	
工員及勤人	15	18.5%	90	70.3%
商 店	41	50.6	11	8.6
家内工業	19	23.5	15	11.7
職 人	6	7.4	12	9.4
合 計	81	100.00	128	100.00

区東両国・北区岩淵町・江戸川区平井町・荒川区南千住の五地区である。松葉町と東両国は、小売店と家内工業の地区、南千住は家内工業および職人の地区、岩淵町と平井町は工員の住宅地区である。その中から松葉町と平井町の二つの地区を選んで材料として考察してみた。この地区の世帯の職業は上の表のごとくであるが、これによつて特徴をはつきり把握することができる。これで見えてわかるように、松

6図 青少年の職業構成 (松葉町)



が住込みの徒弟であることである。学生と無職の者は、世帯主の家族

まずこれらの青少年は学生を除いてかなり多数

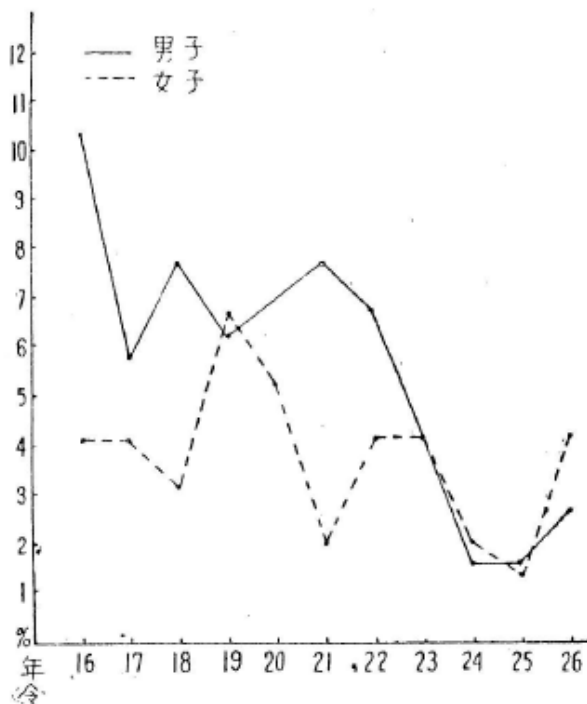
明らかにしている。

まず松葉町から考えてみると、この地区の青少年の職業構成は上の6図のごとくである。この表によつてみると、男子は第二次産業に従事するものが五六%で最も多く、次いで第三次産業の商業となつてゐる。女子は無職と学生が多く五〇%で、次は商業の二九%となつてゐる。まず男子と女子が全く異なつた構成をもつてゐることが特徴であるが、その点は次第に明らかにして行こう。

住宅地区である。文字どおり密集

葉町はいなかにもある商店と家内工業の町なのである。平井は工員の住宅地なのである。この町の様子をいうと、表通りから一步入ると、六畳・四畳半・三畳の三間ぐらいの家が何百世帯と立てこんでならんでいる。庭のある家などはもちろんなく、窓と窓とが三尺ぐらいで向

7図 年齢構成(松葉町)



この表によると、男子で二十才までの層が著しくふくれているのである。女子はそれに比して少ないのである。女子はこういう所へあまり多くはいつてこないのである。このふくれた青少年は農村からの住込み者なのである。そしてここで注目すべきは、二十才を越えたと激減することである。これは商店や家内工業が、まずだいたい四〜五年の間徒弟を置いて、その後はこれを外へ出すということである。経済

である。もちろん勤労青少年にも家族従業員はいるけれども少数である。そこに女子に無職と学生の多い理由があるのである。ところでこの住込みの青少年たちはどこからくるかというところ、まずだいたいが農村からとみてさしつかえないのである。さきに述べた離村青少年はまずこういう所へ住込んでくるとみてよい。その点を示すのが次の年齢構成の図(7図)である。

的にもその方が有利であるから商店や家内工業としてはあたりまえのことである。

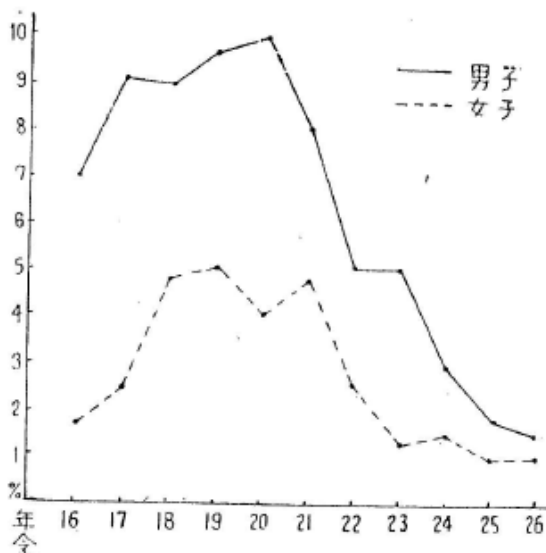
こういう所へ住みこんだ徒弟は現在といえども十二時間労働をしているであろうということは想像に難くない。それは、こういう階層では、あたりまえのことであって、これらの中小工業者は経営者自らが十二時間労働を行っているのである。別に意識して搾取しているわけではないのである。

さてこのように見てくると、これら農村からほうり出された青少年は、都会で五年くらい働いてまたほうり出されるのである。決して将来ともこの生活に位置づいていくというわけではないのである。かれらは五年間働いている間に、一人前の職工や店員となるものもある。そういう者は、新しく職場を求めて大工場や商店にはいつて行くものもある。しかし、五年間の間になんらなすことなく、そのままほうり出される者もまた多いであろう。帰る所なく、行く所のない者となる者である。また、地方から出てきた者で家業をつぐために修業にきた者も少数はあるであろう。そういうものは家へかえって家業をつぐであろうが、これは特例と見た方がよいであろう。こうみると、これら商店や家内工業に働く青少年たちは、その生活を通じて、商工業者として形成されつつあるのである。それは決して能率のよい教育ではないであろう。否、教育とはいえないかも知れない。極めて原始的な見習いである。しかもその後の生活についてはやはり見とおしがないのである。ここでも青少年は生活者として地盤をもたない存在だということである。

これをもつと明瞭に把握するには、中小企業の中で青少年層をとらえてみる必要がある。われわれは東京で中小企業を十一業種とって、その組合を通じて、その中の青少年生活の調査を行ったのである。こ

こにはその年齢構成と出身地をあげておく。(8図・9図) 地域的にとった場合よりも、より純粹に傾向があらわれていると見ることが出来る。こういうように視点をはっきりしてみると、全国的に、このような中小企業に働く青少年は相当の数に上るであろうということが推察される。三十人以下の従業員を有する企業体の従業員は全体の従業員の六〇%ぐらいだといわれている。さらに小さく五人以下を限ってみると、それは全体の三〇%ぐらいといわれているから、中小企業に働く従業員の割合はきわめて高い。そしてその大部分は青少年であろうということも推察に難くないのである。これらの青少年の生活と教育の問題は、きわめて重い比重をもっていることといわざるをえないであろう。そして現在いわれることは、これらの青少年はその生活も教育も全く放置されているということである。そしてそれはただこれらの青少年の問題でなく、実は農村青少年の問題である。これらの都市勤労青少年の生活と教育をいかにするか計画と方策が成り立た

8図 年齢構成—中小企業



ずしては、農村の勤労青少年に対して青年学級や青年団体活動を与えても空念仏だということである。
農村の青年学級や青年団体活動が都市生活を考慮に入れないで行われれば、それは青年にとってナンセン

スでしかないであろう。産業開発青年隊の問題も青年を産業の中にどう位置づけるかの問題のあらわれである。ところがそれは基本的には日本の産業の中に青年をどう位置づけるかの問題である。とすれば、都市の中小企業体の青年をどうするかということは、最も中心的な問題の一つである。それを放置することは意味をなさないことであって、それでは結局農村青年の生活と教育を考えてやることにならないのである。

こうなってくると、この問題は、一つの大きな社会計画の問題として考えられなければならないのである。



9図 (中小企業 776人)

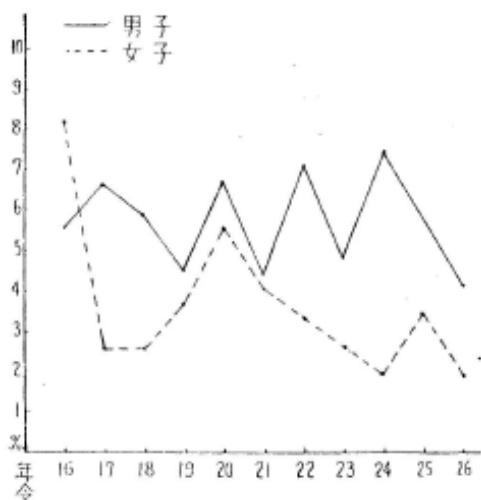
三

次に都市青少年の平井町における類型を考察してみよう。この青少年は一言にしていようと、二代目の青少年である。すなわちかれらの両親が都市生活にはいつてきて、現在ようやく工場・会社はその地位を得て、貧困ではあるが、やや安定した生活をしているそのむすこや娘たちなのである。ここは住宅地区であるけれども、山手方面のそれと異なつて子供を学校へ入れておく余裕のある親は多くないのである。だから青少年は大部分勤労生活に入っている。その職業構成をみると、10図のとおりである。すなわち男子で一七%の学生がいるが、その他の八三%が職業生活にはいつている。その中、第二次産業が多く、五五%がそれである。この第二次産業は松葉町の場合と異なつて大きい工場の工員である。したがつて金属機械製造業が多いのである。女子は学生と無職がやや多い。これは都会の家庭の子女として普通の状態であるうが、この地区はしかし第二次産業に三六%、事務的職業に二六%はいつている。

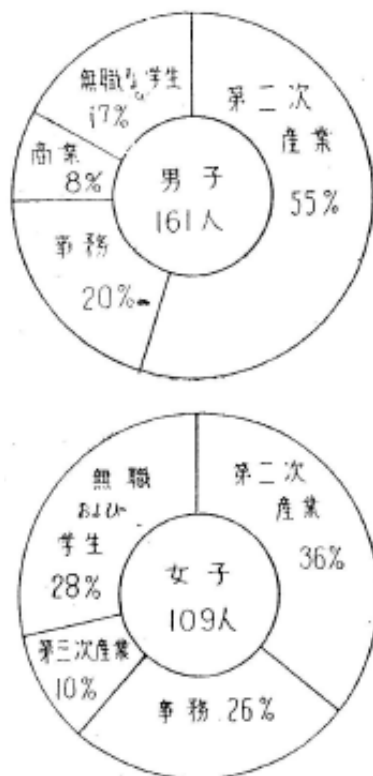
これらの青少年の職業は、親と同一の職業のものも相当に多く、さらには親と同一工場に通うものさえあるのである。まさに二代目的青少年なのである。

その年令構成(11図)をみても、松葉町とはぜんぜん異なつた形を示している。すなわち都会に生れ住みついて親の職業とだいたい同様な職業にはいつて工員として生活するという、いわば明確な方向をもつた青少年である。かれらは現在の生活をつづけることが必然的に将来の生活を打ちたてることになるのである。かれらに必要なものは現

11図 年齢構成(平井町)



10図 青少年職業構成



12図 養成工の親の職業



在の生活をより充実して行くことなのである。したがってかれらは勤勉である。これは実地調査に行った研究所の所員がいずれも異口同音に驚いていたことなのであるが、一軒一軒歩いて、面接して調査票に記入をする、その際の青年の態度の明確なこと、またその家庭の全員が調査に協力すること、非常に勤勉な青年の多いこと、また趣味教養でも他の勤労青少年とは異なった近代性をもつこと、要するにきわめ

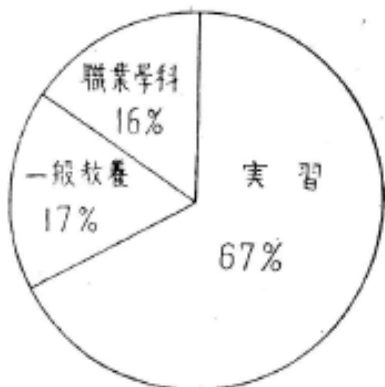
て堅実な青少年群であることである。

いわゆる近代産業にはいつているこれらの青少年が、かくのごとき性格をもっているということは興味あることであるが、かれらの生活が他の勤労青少年と比較して著しく安定していること、またその産業の性格からみて全体としては前途があること、それの中でかれらが技術を所有していること、したがって、たとえかれらの属する一つの企業がつぶれても、産業全体としてみれば将来性があるから、そこに働く青少年も全体としては決して前途が暗いわけではないことなどを考えれば、やはり当然のことといわなくてはなるまい。

ところでこういう青少年に対していかなる位置づけがなされているかというと、ここに大きな問題がある。近代資本主義社会はかれらに対して生活と教育の機会均等を与えていないのである。それを最も端的に表わすものは進歩的といわれる大工場の養成機関である。これは工場自体としては子飼いの工員を養成する機関であってしかも工員としてのみの教育しか施していない。また社会全体としてそれらの教育機関を決して正統の教育機関と認めていないのである。12図は某工場の養成工についての調査であるが、このことを明確に示している。まず第一が親の職業であるが、農業出身はわずかに二二%しかない。明瞭に二代目的性格を表現している。中でも、工業の多いことにわれわれは注目する必要があるであろう。

ところでかれらは養成工として工場に入り、養成機関で教育をうけながら三年を過ごすのであるが、その教育は著しく専門的である。三年間の時間数を専門的教養と一般教養とに分けてみると

13図 教育内容の割合



13図のごとくであるが、非常にひらきがある。これは一般教養としての時間を増すことが必要だということだけでなく、工場の側に一般教養を与えようという考え方がないことである。一般教養はいわばつけ足りなのである。実際の方法としては、専門的教育の中で、一般教養を与えることもできるのであるが、問題はそういう考え方がないことである。

この問題と関連するのが、こういう養成機関を正統的教育機関と認めない社会的ふん囲気である。これは一方で上に述べたような工場の側に教育的な考え方の不足とともに、社会の側に実質的な考え方がないのである。すなわち、この工場の養成機関が果たす実質的教育の意義を認め、これを正統的教育機関としてみとめるだけの識見が一般社会の中に不足しているのである。それがいたずらに形式的な高等学校の設置規準的わくを設けて、教育機関としての位置づけをしないのである。そこで養成工たちは養成工の教育をうけつつ、夜は夜間の定時制高等学校にはいるという奇妙な現象を生み出している。前にあげた工場の養成工は四〇%が夜間の定時制に通っているし、別な工場では、

実に八〇%が定時制に通っているものがある。また事実いわゆる正規の学校教育を受けたものの方が養成工をもつ工場でもより前途が開けているのである。ここにかから養成工を将来まで考えて、いかに位置づけるかという基本的な問題が横たわっている。それが

明確にならない限り、真にこれらの勤労青少年を考えた教育はなり立たないであろう。

かくのごとくみると、近代産業社会にはつきり位置づいていると思われる青少年も、その生活や教育にまだ多くの問題をもっているといわなくてはならない。

四

次に以上と多少異なった工場の勤労青少年の類型がある。それは大きい紡績工場の女工員である。紡績工場の女工員は、かつて女工哀史などということばも生れたごとく悲惨な境遇にあったが、現在は労働基準法もできて、勤労青少年の中では恵まれた状態にあるとみることができる。

まず女工員集団の特色は、大工場の紡績工場はたいがい工場の中に教育機関を所有していて、教育を施していることである。生活に即して教育されつつあるということである。そして教育対象として彼女らを見るとき、実に単一の集団なのである。まず第一に、彼女たちはすべて農村の出身者である。その教育程度は、14図でもわかるように、一色である。すなわち新制中学卒業者だけといってよいほど単一である。年令はまたきわめて限定されていて、普通いわれるように三年半から四年の交替率であるから、ほとんどが二十才以下となっている。そうしてすべて寄宿舎にはいつて二十四時間起居をともししている少女たちである。

このような集団生活の必要上、工場は日常生活に対してはきわめて合理的な方法をとる。たとえば休暇で家庭に帰って来ると、工場の門を入ったとたんに伝染病予防のワクチンを飲ませるといった調子である。その他すべてが近代的合理主義で処理されなければ、少なくとも二三百名、多ければ二三千名以上になる集団を安全に維持して

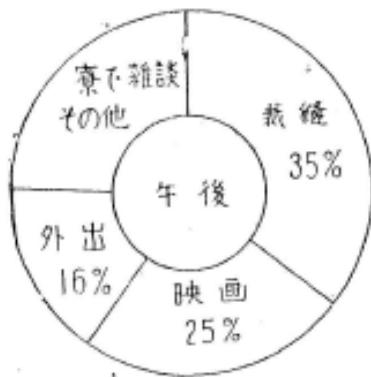
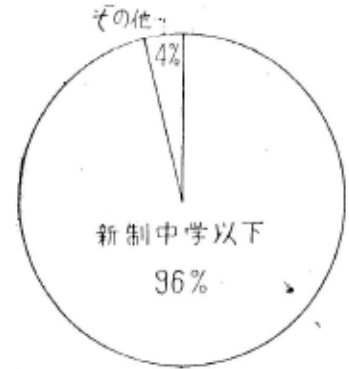
15図 休日の女工員の生活(寄宿舎)



14図(ロ)富山県の某工場

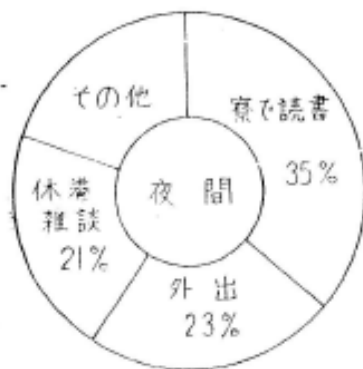


14図(イ)本庄町の某紡績工場



行くことはできない。さらに彼女らの仕事そのものがきわめて合理的に組織された中の一部門を担当して、自分たちの仕事は何であるかがはっきりしている。

寄宿舎の生活は、自治的に行うように基準局も指示しているし、どの工場も積極的にその方針をとっている。八時間の労働が終れば自由な時間が与えられているが、その間に学校の教育が行われている。これはどの工場でも決して能率のよい行われ方はしていない。むしろきわめてお座なり



のものが多いのである。

けれども生活は形成するのであって、全体としての合理的な雰囲気、二、三年の間に農村の少女たちをして見ちがえるばかりにはつらつとした近代的な少女たちたらしめるのである。彼女たちが自分の村や家庭の生活・社会生活に対して行う批判は、農村にそのまま住んでいる同年令の女子青少年とは全く異なっていて非常に高い程度に達している。それは彼女たちが広い社会にふれているということなのである。農村から出て、三、四年の期間を女工員として再び農村にかえる彼女らであるが、彼女らがより積極的に教育されて行くならば、農村生活の合理化に対する大きな力となるであろうと思われる。現在も農村の定時制の分校の生徒などよりはるかに高い段階に到達している者が多いにかかわらず、これらの学校はいまだ定時制の学校としても認められていないのである。定時制として認められることそれ自体が必要なのではないが、社会が、真に意義ある教育を、形式にこだわって、それを認めていないということは奇妙なことであり、ここに現代社会の勤労青少年に対する罪悪があるといわなくてはならない。

(国立教育研究所員)